
幕末異聞 疾風録 3 ～激闘？ 激情！ 意外なる訪問者

花衣 悠希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幕末異聞 疾風録3〜激闘？ 激情！ 意外なる訪問者

【Nコード】

N1944F

【作者名】

花衣 悠希

【あらすじ】

時は幕末。夜も更けた頃、京都河原町の長州藩邸に一丁の駕籠が止まった。だが出迎えた長州藩士、桂小五郎はその中にいた人を見て硬直してしまった。なんと現れたのは高熱でうなされている新選組、沖田総司。なぜ彼がここに？ 一体彼の身に何が？ 様々な思いが交錯する中で、本当に大事なものは・・・？ ドタバタ幕末ファンタジー第3弾です！

第1話…やって来た駕籠

ちら ちら ちら

心もとなく提灯の明かりが揺れる。

——時は幕末、場所は京の都——

既に夜も更け、漆黒の闇が辺りを包んでいる。時間も空間も一息に飲み込んでしまう闇。

その中を一つの影が四条通を東に動いていた。一丁の提灯を頼りにまっすぐ、ただただまっすぐに——。

・・・どれだけ時間が経っただろうか。

視界の先に祇園の華やかな明かりが見え始めた。

一瞬、提灯の灯が止まる。

そして誰に言うでもなく、その影はぼつりと呟いた。

「もう少しだな・・・。」

* * *

さて同刻、河原町の長州藩邸では桂小五郎が相変わらず書類の山と格闘していた。

その彼の隣で本を読んでいた吉田栄太郎が声を掛けた。

「大変ですねー桂さん。少し休憩したらどうです？ 今日もずっと仕事しっぱなしじゃないですか？」

「うーん、そうしたいのは山々なんですけど、明日大事な会合があ

るんで、どうしても今日中にまとめとかないと……。」

「桂さん、いつも用意周到で、ほんっとえらいですよー。尊敬ですよー。」

「いや……。あんまり機転が利かないからこうするしかないだけなんですけどね……。」

栄太郎の賛辞に思わず苦笑する小五郎。

「何か私に手伝えることがあればいいんですけど……。」

その時、不意に表の方がガタガタ鳴った。

「ん？ お客さんかな？ どうしたんだろ、こんな夜更けに。桂さん、ちよつと私見てきますね。」

「ええ、頼みます。」

栄太郎は一つ頷くと部屋から出て行った。

それを見送って、小五郎はうーん、と伸びをした。そして散乱している書類を見やる。

量が多いけど、まあ、今日徹夜すれば何とかかなりそうだ……。

ほつと息をついた、その瞬間――。

「桂さんっつ、桂さん大変です！ ちょっと来て下さい！！」

絶叫ともいえる栄太郎の甲高い声が玄関先から響いてきた。

どうもただ事ではなさそうな様子である。

「?! どうしたんです？」

小五郎は玄関先に顔を出すと、栄太郎が指差すほうを見た。

玄関先には駕籠が一丁止まっている。

――が、その中にいる人を見て、小五郎も絶句してしまった。

その人の顔は熱で赤くほてっていて、具合悪そうに荒い息遣いをしている。意識も朦朧としている様だ。

「桂さん。病人の来客ですよ……。」

栄太郎が半ば呆然と小五郎に呟いたのであった……。

＊ ＊ ＊

しばらく後――。

「しかし、なんで病人がこんなトコに来るんですかねえ。病院じゃないのに。」

栄太郎が腑に落ちない様子で病人と小五郎を見比べながら言った。小五郎にも訳が分からない。

運んできた駕籠かき達も『長州藩邸まで、こいつを乗せてやってくれ』としか言われてないらしい。

とりあえず彼らには他言無用と包みを渡して帰し、病人もこのままにしておく訳にもいかず、こうやって布団に寝かせているのであった。しかし――。

「……どこかで見たことがあるような気がするんですよ……。」

ぽつりと呟いた小五郎にびっくりした様子で栄太郎が言った。

「この人を、ですか？」

「ええ……。」

「私には全然分かりませんねえ。土佐人でもなさそうですし……。そういえば、あの駕籠壬生から来たって言ってましたねえ。壬生って何かありましたっけ？」

「壬生……。」

――壬生ねえ。そういえば、最近江戸からやって来た浪士組がたむろしてたっけ？ ん？ まさかこの人、試衛館道場の――？！

「?!」

思わずまじまじと病人の顔を覗き込む。間違いない、こいつは――。

「どうしました？ 何か思い当たるところでも？」

小五郎の急な狼狽ぶりに、栄太郎が怪訝そうな顔で言った。

だが、小五郎はそれに答えず頭を抱えてしまった。

「桂さん？」

「・・・これは、やっかいなものを抱えてしまいましたよ、栄太郎
——。」

「え？」

「この人、江戸試衛館道場の沖田総司ですよ・・・。」
「？」

「会津預かり壬生浪士組の一人・・・つまり。」

栄太郎にも事態が飲み込めたらしい。

「つまり、——敵ってこと？」

「そう。」

栄太郎も思わず病人の顔を見つめてしまった。

第2話：仏頂面の蘭方医

「・・・どうしよう、桂さん。」

固まった空気の中、ぽそっと栄太郎が言った。

「こうなっては、もうどうしようもないですよ・・・。何でここに来たのかは分からないですけど、このまま放り出す訳にもいかないし、ここはとにかく全快してもらって帰ってもらうしかない・・・。」

「はあ。まさに、敵に塩を送るって感じですかね？」

小五郎と栄太郎がどよんと暗くなっている時、不意にするすると襖が開いて人影が現れた。

「?!」

「村田さん?! 何でここに？」

入ってきたのは長州の蘭方医、村田蔵六であった。祇園で買ってきたのか、手には豆腐と徳利を持っている。

蔵六は相変わらずの仏頂面であった。が、その表情のまま布団の上で寝ている総司をちらっと見て言った。

「病人はちゃんと来たようだな。」

意外な言葉に小五郎は慌てた。

「ち、ちよっと待って、村田さん。あなた、なんで知ってる?!」

蔵六は平然として言った。

「私が頼んだから。」

あまりの言葉に小五郎も栄太郎も目が点になってしまった。

蔵六はそんな二人の様子に構わず、総司の額に手を当てた。

「かなり高いな。とりあえずこれでいいか。」

そして持っていた豆腐を総司の頭の上に乗せる。

* * *

小五郎は思わず蔵六の着物の袖をつかむと隣の部屋まで強引に引っ張り込んだ。そして彼の目を見据えて言った。

「どういふことか説明してください！」

「どういふことって、まあ、こういうことだ。」

蔵六は当然といった風に言った。小五郎はその態度にカチンときてさらに詰め寄る。

「それでは分かりません！ 大体ここは病院じゃありませんし、会津方を匿う理由ありません。」

「・・・私は医者だから、困っているのがいたら素性なんぞ関係なく治してやるのが役目だ。それだけのことだ。他意はない。」

「何悠長な事言ってるんですかっつ。このご時勢、こちらが良かれと思つてやったことでも、下手打つと逆恨みを食つて大変な事になるんですよ。経緯をちゃんと説明してもらわないと、打つ手も打てなくなるんですよ！」

怒気を発した小五郎に、蔵六はさすがに重い口を開いた。ぽつぽつ話し出す。要約すると、こういうことらしい。

どうやら数日前から沖田総司の熱が下がらないということ、壬生では大騒ぎだったらしい。それで、彼は副長、山南敬助に無理やり連れてこられたという。

「八木邸ではすごいことになっていた。」

蔵六は遠い目をした。

蔵六の見立てでは重病でも何でもなかった。それで、ただの風邪だ、おとなしく寝ていれば治ると言ったのだが、それでは皆納得しない。さすがの彼も閉口していたのだが、ただ、ここの周りはずっ

と騒がしく、とてもゆっくり養生できる様な環境ではないとも気づいていた。下手すると無理させて風邪をこじらせてしまう可能性もある。

蔵六は心を決めた。

「これでは治るものも治らない、と思った。それで、ここまで私が乗ってきた駕籠を使って長州藩邸まで送った。」

小五郎は腕組みをした。不本意だが人助けと思って割り切るしかないか……。

「……分かりました。ま、仕方がありません。一時的にお預かりする、ということでした承しましょう。」

立ち上がろうとした小五郎に今度は蔵六が小五郎の羽織の袖を引っ張った。

「……桂さん。」

「何です？」

「一つ謝っておかなくてはならないことがある。」

蔵六の目は真剣そのもの。その様子に小五郎は怪訝そうな顔をした。

「？ 長州藩邸を使ったことですか？」

「いや……その、」

蔵六は息をついだ。

「実は黙って連れてきたんだ。こいつを。」

「な、何ですって?!」

小五郎は目の前が真っ暗になってしまった。

よりもよって——誘拐?!

傍には珍しく申し訳なさそうな蔵六がいた。

第3話：怒りの恋人

半刻後――

ううう・・・どうしたらいいんだ・・・。

机の上に思わず突っ伏してしまった小五郎である。

とりあえず病人をそのままにはできないので、栄太郎に氷を貰ってくるように頼んだ。蔵六はずっと総司を診ている。だから、これはこれでいい。

問題は――壬生の面々である。

ただでさえ会津と長州は仲が悪い。かつ、あの連中は真っ直ぐすぎて融通が全く利かないのである。特に土方さんの頑固さときたら天下一品と言っている。

また、よりにもよって、こっちが誘拐まがいのことをしているので、善意で押し切る訳にもいかない。一体何と言って彼らを納得させればいいのか――。というか、そもそも話を聞いてくれるかどうか・・・。

小五郎は天井を仰いだ。

今頃彼ら血眼になって捜しているだろうなあ。

ということは、ここを嗅ぎつけるのも時間の問題か・・・。

「下手したら血が流れる、か――。」

思わず壁にかかった刀を見やる。

剣には自信があるものの、こんなことで刀をふるいたくはない。できれば話し合いで穏便に済ませたい。

そう、蔵六が医者である様に、自分は外交官なのだから――。

＊ ＊ ＊

その時、急に玄関先が騒がしくなった。

栄太郎が帰ってきたか、それとも壬生の連中が嗅ぎつけたか――。

小五郎は思わず身構える。

が、座敷に入ってきた人を見て小五郎の思考は固まってしまった。
真紅の着物を纏った女性――、幾松である。

「いつ、いいいいいいいい幾松さん?!」

あまりに意外すぎる人の登場に目を白黒させている小五郎に、幾松はどかどかと足早に近づいていった。

明らかに怒っている。

小五郎はやっとこれだけ言った。

「こ、こんな時間にどうされたんです?」

「こんな時間に、じゃありませんわよっ!」

ものすごい剣幕に自然及び腰になっている小五郎。

「私の知らないのをいいことに、他の女の方を囲い込んでるっていうのは一体どういうことなんですの!」

「・・・は?」

呆気にと取られて、何のことを言っているのか分からない様子の小五郎に幾松はブチ切れ寸前である。

「ち、ちよつと待って幾松さん。私には何のことだかさっぱり・・・。」

「しらを切られるのもいい加減にしてくださいます? 先ほど栄太郎さんに氷を頼まりましたわよね?」

「ええ、それが何か?」

「今、お屋敷の方には病人はいらっしゃいませんわよね？」

「まあ、そうですが・・・。」

「じゃあ、なんで氷が必要なんですか？・・・答えは簡単ですよ。あなたに他の女の方がいらっしゃって、その方が病気で要るのでしょうか？」

「いっ?！」

おいつ、いきなり話が飛躍してないか?!

幾松はすっかり誤解してしまっているし。うう、どうしよう・・・。

「すいませんねえ、桂さん。」

いつの間にか栄太郎が部屋に入ってきていた。

「栄太郎、あなた・・・。」

恨めしそうな顔の小五郎に、栄太郎は慌てて手を左右に振った。

「言っときますけど、私、何も言ってませんよ。私のなじみさんに頼もうとしたら、いきなり幾松さんが出てくるんだもん。どうにも止まらないんで、ここは桂さんに止めてもらうしかないかなーって。」

いや、私でも止まるかどうか・・・ってか、申し訳なさそうにしながら、なんか楽しそうなんですけど、栄太郎・・・。

「小五郎、なーんか面白いことになってるみたいだなー。」

急に栄太郎の後ろからひよっこり見知った顔がのぞいた。高杉晋作である。

「し、晋作?! あなた何でここに? 萩に帰るって言ってたじゃないですか?!」

「いやー帰るつもりだったんだけどさー。隣の部屋で幾松姐さんがすごい剣幕だから気になって様子見に来た。でも知らなかったな。小五郎に他の女がいるとはねえ。」

その言葉に小五郎は思わず頭を抱えてしまった。上目遣いに晋作を見る。

「・・・あなたが焚きつけましたね、晋作。」

「さあ、どうだろうねえ。」

晋作も心底楽しそうである。

逆側からは幾松の鋭い視線が痛い。何はともあれ、ここはとにかく誤解を解かなくては。

「と、とにかく、幾松さん。これは誤解なんです。」

「何がですか。」

「今、長州藩邸に病人が運ばれてきたんです。だから氷が必要なんです。それだけのことなんです。」

「病人って誰なんですか？」

小五郎はうっと言葉に詰まった。

「・・・それは言えません。」

「ほら、言えないって、やっぱりいい方なんだわ。」
袖で目頭を押さえる幾松に狼狽する小五郎。

「身元を明かすと後々大変なんで、詳しくは言えないんです。でも、その病人は――。」

「まあ、姫さんの様なもんだがな。」

意外な方向からの声に小五郎と幾松、栄太郎と晋作も思わず振り向いた。

そこには、蔵六が相変わらずの仏頂面で立っていた。

「?! あんたも来てたんか？」

晋作が声をあげる。

「ほらっ、姫さんって!」

幾松が小五郎を強くこづいた。

小五郎はげんなりした。

「村田さん。あなたまでそんな誤解を生むようなことを・・・。」

「うむ。まあ、それは冗談だ。」

全く冗談になってないよ・・・。

「しかし、男でも女でも病人は病人だ。・・・それより、氷はまだか？　かなり熱が上がっている。早急にお願いしたい。」

蔵六はそれだけを言うと、また隣の部屋に入ってしまった。

第4話：薄氷の約束

「・・・ということなんで、幾松さん、よろしくお願いします。」

小五郎は深々と頭を下げた。

「嫌ですわ。」

幾松はつれない。

「幾松さん、そんなこと言わずに頼みますよう。」

「そうそう、そんなへソ曲げててもいいことないぞ。」

栄太郎と晋作も口添えする。

幾松はちら、と小五郎を見た。

「幾松？」

「小五郎さま、あなた全っ然分かってませんわ。私がなぜ怒ってるのかってこと。」

「へ？」

「小五郎さま。最近仕事が忙しい忙しいって全然私と会って下さらないじゃないの。私がどんな気持ちでいるか考えて下さったことあります？」

「あの・・・。」

「私のこと、お嫌いになったんじゃないか、とか、他にいい女の方ができたんじゃないか、とか不安でいっぱいですよ。いつも。」

「はあ・・・申し訳ありません。」

「ですから!」

幾松はずいっと小五郎の前に体を乗り出した。彼女の香が小五郎の鼻をくすぐる。

「明日は必ず会って下さいますわよね!」

「え?! は、あ、あの明日は・・・。」

「会って下さいますわよねっ!」

「はっ、はいっ、必ず・・・。」

小五郎が答えたその瞬間、間髪入れずに幾松の小指が小五郎の小指

にからみついた。そして幾松はにっこり笑いかけた。

「約束ですわよ。指きり。破ったらどうなるか―。」

急に幾松の目が氷のように冷たくなった。

「――分かってますわよね。」

「・・・だ、大丈夫ですよ。そんな心配しなくても・・・必ず伺いますから。」

小五郎は精一杯の笑顔で言った。

「楽しみにしてますわ。」

幾松は満足そうに立ち上がった。そして玄関先に歩いていく。

「あつ、幾松さん。私、お供いたします。」

栄太郎があわてて幾松を追いかけた。

＊ ＊ ＊

部屋に静寂が戻る。

外では幾松と栄太郎の話し声が響いている。

小五郎はぐたつと脱力した。

「はあ・・・疲れた。」

「すっげー女だなあ。お前、絶対尻に敷かれるぞ。それよりさ―。」

「何です?」

「明日大事な会合があるって言ってなかったか? お前。大丈夫な
んか? あんな約束しちゃってさ―。」

「・・・実際大丈夫なんかじゃありませんよ・・・。勢いでつい言
っちゃいましたけど・・・。」

がつくりうなだれる小五郎。

「ま、幸い、明日の時間までは約束しなかったんで、なんとか・・・
なんとかして見せますよ。ええっ! 絶対!」

「・・・やけくそだな、オイ。」

無理やり勢いづけてる小五郎がなんだか不憫に思えた晋作であった。
「あー、でもさ。それより小五郎、お前が幾松姐さん送ってった方が喜んだんじゃないの？ 栄太じゃなくってさ。」

「そういう訳にはいきません。」
あっさり断言する小五郎。

「なんで？ 幾松姐さんより、得体のしれん病人の方が大事なんかな？」

「なっ……。そっ、そんな訳ないでしょっつ。見くびらないで下さい！」

小五郎はカッと顔を真っ赤にすると晋作に詰め寄った。

「いや、悪い。そんなつもりじゃ——。」

思わずひるんだ晋作に小五郎は一つ息を吐いた。

「あの病人は、壬生浪士組の沖田総司なんですよ！ これが放つとけますか？」

「何っ?!」

絶句した晋作に、小五郎は続けた。

「遅かれ早かれ、本番の来客があるんですから。栄太郎やあなたでは荷が勝ちすぎます。」

「本番ねえ……。」

晋作も思案顔で黙ってしまった。

その時、玄関先がガタガタ鳴った。

「あー、俺見てくるわ。栄太だろ、きつと。」

立ち上がろうとした小五郎を手で制して晋作が部屋から出て行った。それを見送る小五郎。

なんか落ち着かない夜だなあ。

ふうっ、とため息をついた、まさにその瞬間——。

「うわーっ！ お前〜?!」

晋作の絶叫が藩邸中に響き渡る。

しまった！　もう来た？！

小五郎は弾かれる様に部屋を飛び出していった。

第5話：玄関先の攻防

「う、うわわわわわ……。そんな物騒なもん、いきなり振り回すなよ。」

「穴戸とか言ったな、貴様！ ふざけたマネしやがって。この間の借りはここで返させてもらおう！」

小五郎が玄関先に飛び込んだ時、刀を抜き放って肩をいからせている壬生浪士組副長の土方歳三と、その怒りを持って余して弱っている晋作とが目に入った。

……予感的中……

小五郎はがっくりきた。思わず柱に手をかける。

「……晋作、あなた。よりもよって、ご家老様の名を騙るとは……。」

「おおっ、小五郎。いいトコに来た！ なんとかしてくれよう、こいつ。」

すぎる目つきの晋作。

「やれやれ……。」

小五郎は歳三の方を向いた。居住まいを正す。

「先般は私どもの者が失礼した様で、申し訳ありません。——とりあえず、一旦その刀をおさめてもらえませんか？」

だが歳三はあくまで頑なである。

「そいつを引き渡してもらうまではだめだ。」

「それはできかねます。」

「じゃあ、実力で貰い受けるまでだ。」

今にも飛びかかってきそうな様子に、小五郎は一喝した。

「ここは長州藩邸です！ そんな乱暴なこと許されると思ってるの

ですか！」

「そうだそうだ。そんな無茶したら、お前んトコの姫さん、どうなるか分からないからなー。」

続いて晋作がそう言った瞬間、歳三の顔色がさっ、と変わった。

小五郎も青くなる。そしてキッと晋作を睨んだ。

「晋作っ！！」

「うっ、あ、悪い・・・つい・・・。」

晋作も自分の失言に慌てふためいている。

「そうか・・・。やっぱり山崎の言うとおり、ここにいたか。一度ならず二度も！俺らをバカにしやがって！貴様ら許さねえ！！」

歳三の目は真っ赤に燃え滾っている。

刀を握る手にも力が入っている。

本気で斬る気だ・・・。

プライドを傷つけられた者ほど怖いものはない。

小五郎はじりじりと半歩後ずさった。

歳三から視線を外さないようにしながら、横目で距離を値踏みする。刀掛けまで三步、だが刀を取るその間に踏み込まれる可能性は高い。歳三の刃は一瞬でも気を抜けば容赦なく襲い掛かってくる気迫に満ち満ちている。

果たして間に合うか？

小五郎が意を決した、その時――。

第6話：氷の嵐

「桂さん。氷いっぱい貰ってきましたよーっ。良かったですねー。
?! う、うわーっ?!」

ガラガラガラ

いきなり大量の氷が玄関先から歳三の体めがけて襲いかかってきた。
あまりのことに、さすがの歳三も思わずひるむ。

だが、その瞬間を小五郎は見逃さなかった。

さっ、と歳三に近づくと彼の手から刀を叩き落した。そしてそのままその刀を晋作の方へ投げ飛ばす。

それを慌てて晋作が掴んだ。

「あっちゃ、ごめんなさいっ! お客さんが来るとは思ってた。あまりの重さに思いつきりぶちまけちゃいました。いやー、桂さん、幾松さんがめっちゃ奮発して下さいましたよ。あとでお礼言っというて下さいね!」

氷をぶちまけた張本人、栄太郎が半ば自分の手柄の様に威張って言った。

そして、歳三の方を向く。

「あー、すいません。痛かったですよねー。ごめんなさい。」

「・・・。」

「どうしました?」

「いや・・・。」

栄太郎のあまりの邪気の無さに、歳三は何とも言えない複雑な顔をしている。

「さすがだな、栄太。いい仕事だったぜ。」

苦笑いしている晋作に、栄太郎は事情が分からずきよとした表情をみせた。

その時、奥から人影がのっそり現れた。蔵六である。

「うるさい。病人がいるんだ。少しは静かにしてくれないか。」

蔵六はそう言いながら、玄関先に知らない顔があるのを見つけた。一瞬、彼の太い眉がぴくっと動く。

「んー?!」

蔵六はそのまま真っ直ぐ歳三の方に向かっていく。

「村田さん？」

「おいおい、危ねーぞ。火吹き・・・もがっ！」

危険を察知した小五郎は晋作の口に素早く手をかけた。

「余計な事は言わないっ。」

「うぐぐ・・・。」

目を白黒させている晋作。

しかし、歳三もこの蔵六の行動に理解しがたいものがあつたらしい。思わず眉をひそめて身構える。

だが、蔵六は構わず言った。

「私は長州の蘭方医、村田蔵六という。お主、まさか『ヒジカタサ
ン』では？」

「?!」

いきなり見ず知らずの人間に名を当てられて動揺する歳三。手がわなわなと震えている。

しかし、驚いているのは歳三だけではなかった。

小五郎もだった。

何しろ、彼がここに来てから誰も一回も彼の名を口にしていないのだ。

なぜ？

第7話：好きな人

蔵六は歳三の様子など意にも介していない様だった。

「違いますかな？」

「・・・い、いかにも、私が土方ですが。」

歳三はやっとそれだけ言った。

蔵六は目の光を少し緩めた。

「それならば、彼を看てもらえないだろうか。もう大分落ち着いているが、明日までは絶対安静。いいですか。」

彼は有無を言わさぬ口調でそう言うと、奥の部屋について、と目をやった。

襖は開いていて、病人が寝ている布団が目に入る。

「総司！」

歳三はそう叫ぶと、蔵六を押しつけて奥の部屋に飛び込んで行った。

蔵六はそれを見やるとぼりぼり頭を掻いた。

「氷を奥の部屋に入れときましよう。これ以上余計なことをするのもお邪魔でしょうから。」

小五郎がそっと蔵六に言った。

「うむ・・・。」

「そうですね。」

栄太郎も頷くと、いそいそと氷を運びだした。

蔵六も珍しく黙々とそれを手伝う。

小五郎は作業をしている蔵六にこそっと耳打ちした。

「それにしても、なぜ彼が土方さんって分かったんです？　もしかして、お知り合いだったんですか？」

蔵六の眉がぴくっと上がった。

「いや、初対面だ。」

「じゃあ、なぜ？」

「・・・病人の子があまりにもうわ言で『ヒジカタサン、ヒジカタサン』って言って袖を引っ張るんでな。もしかしたら、思っただけだ。」

蔵六は淡々としていたが、急に小五郎の目を見た。

「・・・すまなかったな、桂さん。」

「え？」

「病を治すのは、静かな場所もそうだが、好きな奴が傍にいてるってのも要件かもしれない。」

「？」

「・・・ちよっと勉強になった。」

蔵六はそう言っていると、薄く微笑を浮かべて上の階に上がって行ってしまった。

好きな奴・・・かあ。

思わず脳裏に幾松の笑顔が浮かぶ。

彼女はいつまでも自分を待っていてくれるのだろうか・・・。

こんなろくに会うこともできない自分を――。

が、その瞬間――。

「うわーっ、か、桂さんっ！ 大変です！！ ち、ちよっと来てくださいーっっ！」

栄太郎の絶叫が部屋中にこだました。

どうやら壬生の連中が大挙してやって来たらしい。

結局、小五郎は朝まで対応に追われることになってしまったのであった。

* * *

翌日――

「本っっ当に申し訳ありませんでしたっ。」

深々と頭を下げているのは沖田総司本人である。

「こんなに皆さんをお騒がせしてしまつて……。」

本当に申し訳なさそうに小さくなっている。対して、

「あー、もういいだろ、総司。帰るぞ。」

心底関わりたくなさそうな、嫌そうな顔の歳三。

「村田さん、と言いましたか。診てくださつて、ありがとうございますました。」

「うむ。治つてなによりだ。」

歳六は興味なさそうにぎっくり言つた。さりげなくその後を小五郎がフォローする。

「まあまあ、病み上がりですから、あまり無理をしません様に。」

「はい、桂さんにもお世話になりました。」

につこり笑つて去つていく総司と苦い顔の歳三を見送つて、小五郎たちは藩邸に入る。

「まーったく、散々な一日でしたねー。私、もう寝不足ですよー。今日は一日寝させてもらいますねー。」

栄太郎は大あくびした。

「どうぞ、ごゆっくり……。」

言いかけて、はっ、とする小五郎。

「い、今何時くらい？」

「え？　もうそろそろお昼時ですけど……。」

小五郎の顔が青くなる。

「し、しまった。約束がー。」

「？ 会合は夜からじゃ？」

「その前に打ち合わせの約束があつたんですよーっ。忘れてたー！」
小五郎は慌てふためくと、とりあえずそこらにあつた書きかけの書類の束を引っつかんでバタバタと玄関先から外へ出て行く。

「おーい、小五郎！ そんなに急いで最後に幾松姐さんトコ行くの忘れんなよーっ。」

二階の窓から晋作の声が飛んだ。

「分かってますよーっ！」

小五郎も負けずにやり返す。

——外は今日も雲ひとつない晴れ。

爽やかな風が足早に進む小五郎の頬を通り過ぎていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1944f/>

幕末異聞 疾風録3～激闘？激情！意外なる訪問者

2010年10月16日00時46分発行